團體の勢力もまた盛になることは自明の理であつて、權勢あるビーの下にあるアウルは、互ひに益々その結合を固くし、近隣の家族や、異姓に對しても權勢を及ぼし、遂には此等の家族または異姓の下にあるすべてのアウルがかかるビーの下に付いて新たなる團體を作り、これによつて益々安全にその利益を保護しようとすることになる。だから初めは何等目立たなかつた姓部が、或るビーの個人的勢力に依つて屢々新らしい有力なる團體となり、そのビーの名がかくして出來た新團體の名稱になつて、生時は勿論、死後に及んでも長く續いて行くものがある。

アウルまたは姓の一部分と同様に、姓そのものもまた社會的團體であつて、他の姓に對して自からの利益を擁護するものである。それでもしも各姓の間に爭が起つた場合には、姓の權利を代表するビー等の會議に依つてその決定を爲すことになる。此の場合に於てもビーの個人的勢力が事件を決定するについて重要なる勢力となることは勿論である。もし兩派の一方が此の會議の決定に不滿足である時には、こゝに武力に訴たへてその主張を貫かうとする。即ちヂアウと稱する戰爭狀態が開かれるのである。こゝに注意すべきことはキルギス人の考に依ると、一のアウルはそのアウル内の個人の他のアウルに對する犯罪について責任を持たねばならぬと見ることである。これはただアウルとその個人との間に限られたことではなく、各姓とその一部分との間、また姓の一部分と各アウルとの間に於ても同様に認められる。

昔から姓と姓との間に大なる戰爭が行はれて、結果諸姓が合併せられ混合せられて、こゝに部屬なるものを形成し、この部屬がまた同様の事情によりて黨屬とも稱すべきものを形成した。今日のキルギス族の中にもこの黨屬に當るものが存在する。しかし露西亞がキルギス族を從へて以來は、此等の部屬や黨屬は、只だ名ありて實なきもの